

魂の不死証明とイデア

——『パイドン』解釈のための一考察——

加藤 幸夫*

『パイドン』における魂の不死証明に関するいくつかの議論のうち、最後の証明（102A-107B）だけは、その構成上、一応のまとまりをみせているといわれる。その理由は、以前になされた証明（69E-84B）が、ソクラテスとの対話者シミアスやケベスから、同意を得ることができなかったのに対して、最後の証明だけは、彼らからの強い反論を引き起こさなかった、という点にある。¹⁾ 論証の最後でソクラテスが「すると、ケベス、結論はもはや絶対に動かないね。——すなわち、魂は不死にして不滅なるものであり、そして、われわれの魂はほんとうに、ハデスにあって存在をつづけるのだ」（106E-107A）と明言しているところからすると、一見、その証明は完結したもののように思われる。ところが、これまで数多くの研究者により、この最後の不死証明をめぐるさまざまな論考が試みられ、その証明としての成否さえも、争点の一つとなっているのである。

本稿は、イデア理論とのつながりにおいて展開された、魂の不死証明の全体的構成と、その論証の特性を探ることを主な目的とするものである。

1

『パイドン』における最後の魂の不死証明は、ケベスの反論に端を発している。その証明に先立ち、反対の物の相互生成に関する議論（69E-72E）や、「学び知ることは想起である」という想起説に基づく魂の先在証明（72E-77B）などによって、魂不死の論証がすでに試みられていたのである。ところがケベスは、それらに対して十分に納得することができず、次のような反論を示して、さらに新たな証明をソクラテスに求めたのであ

原稿受付：昭和63年3月30日

*長岡技術科学大学計画・経営系

る。

魂というものは、いわば肉体という衣服を織り、それを身に付け、着つぶしてはまた織り直していくようなものであり、したがって、魂が長い年月を生きる場合には、数多くの肉体を着つぶすのである。なるほど、魂はその本性的な強靱さのゆえに、われわれの生前においても存在し、さらに死後においても、ふたたび生死の過程を何度も繰り返すことが、充分に可能であるかもしれない。だが魂は、数多くの生まれかわりを経るうちに疲弊してしまい、ついに何回目かの「死」にあたって、完全に滅んでしまうのではないかという可能性は、依然として残るのである。その可能性が否定されないかぎり、つまり、魂が完全な意味で不死不滅であることが証明できないかぎり、死に直面する者は、自分の魂が、肉体からの分離とともに、完全に滅んでしまうのではないかという恐怖を、つねに抱かなければならないのである (87B-88B)。

反論の内容はほぼ以上のようなものであった。

ところが、ソクラテスからすると、ケベスの提示した反論に答えようとするためには、「広く生成と消滅全般について、その原因を徹底的に論究する」ことが必要不可欠なことであった。つまり、生成と消滅の全般に互る原因の徹底的探求が、魂不死の証明につながるのである。²⁾

そこで彼は、原因の探求にまつわるかつての体験を踏まえながら、原因の探求にあたって取るべき方法を明らかにするのである。

ソクラテスの自伝的物語によると、彼は、かつて自然研究に強い関心を持ち、事物の生成・消滅・存在の「原因」を探求することに熱中していたとき、「万物を秩序づけ、万物の原因となるのはヌース（知性）である」とするアナクサゴラスの説を耳にした。

ソクラテスにとって、事物の生成・消滅・存在の原因を探求するということは、当の事物が「いかなる仕方 で存在し、あるいは、いかなる仕方 で他の何らかの働きをなしたりなされたりするのが、そのものにとって最善であるかを発見すること」(97C)を意味していた。従って、もしもアナクサゴラスの「万物の原因はヌースである」という説が正しければ、ヌース

はあらゆるものを、最善であるような仕方でも秩序づけ、位置づけるものであるということになる。

ヌース原因説への大きな期待を抱きながら、ソクラテスは直接アナクサゴラスの書物を読み進んだ。ところが、アナクサゴラス説では、ヌースが何ら機能しておらず、また、事物を秩序づけるいかなる原因も、ヌースに帰されてはいなかったのである。彼の説で原因として示されているのは、単に、空気とかアイテルとか水とか、その他妙なもののばかりで、事物の起源やその必要条件とおぼしき、物質的原因だけが指摘されていたのである。したがって、アナクサゴラスの原因論は、ソクラテスの目的論的立場からすると、全く期待を裏切るものであった。すなわち、ソクラテスの立場からすれば、「善というひとつの適正な力が、文字どおり万物を結束し統合する」(99C5-6)のであり、さらに、万物の原因を探究する際には、「人間自身を問題にする場合でも、ほかのいかなるものを問題にする場合でも、そもそも何が最上で最善 (το ἄριστον καὶ τὸ βέλτιστον) であるか」(97D2-3)ということだけが、考察の基準となるのであった。そこで彼は、機械論的な自然学による原因の探究を離れて、理論的考察に基づく彼独自の方法で、原因の探究をめざしたのである。その方法が仮説法といわれるものである。それは、いずれの場合においても、ソクラテス—プラトンからみて、最も確実であると判断されるロゴス(言説)を前提として立て、その前提と一致すると思われる事柄は真であると定め、前提と相容れないと思われる事柄は真でないとは決める方法である(100A)。

2

魂の不死論証を議論の最終的目標に措定し、プラトンが最初の前提として立てたのが「エйдス(イデア)の存在」である。彼は、『美』や、『善』や、『大』や、その他すべてそういったものが、純粹にそれ自体だけで存在する(100B5-7)」という仮説を、確かな前提として設定する。次に、このイデア存在説と密接な関わりをもって導き出されるのが「イデア原因説」である。それは、「もし、『美そのもの』のほかになにか美しいものが

あるならば、それはただ『美そのもの』（美のイデア）にあずかる（μετέχειν）からこそ美しいのであって、他の原因によるのではない（100C4-6）³⁾という言葉に表されるもので、イデアは事物の性質の原因である⁴⁾という説である。従ってたとえば、大きいものを大きくあらしめているものは「大」のイデアにはかならず、「大」のイデアこそが大きくあることの原因なのである。しかも、「同じことは、どのようなことについても言える（100C）」のである。

そこでプラトンは、「ひとつひとつの形相がたしかに存在し、そしてほかの物は、いずれもこの形相にあずかることによって、形相と同じ名前をつけて呼ばれるようになる（102B1-2）」ということをし、真なる前提としたうえで、大—小、熱—冷、奇数—偶数などの反対関係に関するイデア論的議論を展開している。

「大」—「小」の反対関係について彼は次のように述べている。

ただ単に「大そのもの」が、同時に大でも小でもあるということを決してのぞまないばかりでなく、「われわれのうちにある大」もまた、決して「小」を受け容れようとせず、凌駕されることのぞまない。そして、反対物である「小」が攻め寄せてくるときは、退却して場所をゆずるか、それとも「小」の来襲とともに滅びるか、この二つのうちどちらかのことが起こる。ふみとどまって「小」を受け容れ、以前と別のものになるということは肯んじないのだ（102D6-E3）。⁵⁾

この説をもとにプラトンは、「反対性そのものは、決して自分と反対の性格になろうとはしない（103C7-8）」という反対性相互の排除関係について、一つの命題を導いたのである。

この命題を前提にして、次に彼は、「冷」と「熱」の反対性について、雪や火といった自然的事物を例に出して議論を進めている。

形相としての「冷」と「熱」の反対関係は明らかなことである。ところが、「冷」は雪と同一のものではないし、「熱」も火と同一のものではない。そして、雪は、それが雪であるかぎり、「熱」を受け容れた上でなお以前と同じもののままでいて、熱い雪となるようなことは決

してありえない。「熱」が攻め寄せてくれば、雪はそれに場所をゆずって退却するか、もしくは滅びるか、そのどちらかである。他方また火も、「冷」が攻め寄せてくると同様に退却するか滅びるかのどちらかである (103C-D)。

そこでプラトンは、このような自然的事物における経験的事実に基づいて、反体性そのものの受容関係と排除関係の他に、さらに事物の性格を原因づける形相 (エイドス) について、新たに次のような一般的命題を提示する。

形相そのもの (*αὐτὸ τὸ εἶδος*) がつねに、「熱」とか「冷」とかいった) 自分の名前で呼ばれる資格をもつのは、当然のことであるが、さらに別のあるもの、すなわち、形相そのものではないが、しかしそれが存在するかぎり、つねにその形相のもつ性格をおびるもの、そういうもの (雪や火) もまた、同じ名で呼ばれる資格があるのだ (103E2-5)。

これまでの議論内容をさらに明確にするために、プラトンは数学上の概念から、「奇数」と「偶数」を取り上げて説明を展開する。

「奇数」自体は当然つねに「奇数」と呼ばれるのであるが、奇数と直接同じものではないが、しかしその性格が、もともと奇数と切っても切れない関係にあるために、それ自身の名前と同時に、つねにまた「奇数」とよばれるべきものが存在する。例えば「三」である。「三」はそのまま「奇数」と同一ではないにもかかわらず、つねに、それ自身の名前つまり「三」と呼ばれるとともに、また「奇数」の名でも呼ばれるべきものである。他方、数のもう一方の系列に属する「二」や「四」などは、「偶数」と直接同じものではないが、「偶数」の名でも呼ばれるものである。しかも、「三」は、そのまま三でありながら、偶数となることは決してないし、他方、「二」もそのまま二でありながら奇数となることは、決してない。ところが、「二」と「三」は直接反対関係にあるというものではないのである (103E-104C)。

以上のことから、次のような説が引き出される。

「熱」－「冷」, 「奇数」－「偶数」などのように、反対の性格自身どうしが、互いに相手の性格を受け容れないばかりでなく、さらには、互いに直接反対関係にはないが、しかしつねに反対の性格を内に持っているようなもの、そういうものもまた、自分の中にある性格（形相）と反対の性格（形相）を受け容れず、それが攻め寄せてくると、減びるか退却するかのどちらかである（104B）。例えば三は「偶数」と反対ではないのに、それを受け容れない。なぜならば、三はつねに「偶数」と反対の性格を繰り出してふせぐからである。同様に、二は「奇数」と反対の性格を繰り出してふせぎ、火は「冷」と反対の性格を繰り出してふせぐのである（104E-105A）。

これをプラトンは、次のような一般的な形式で定義している。

ただ単に直接反対関係にある性格どうしが、互いに相手を受け容れないばかりでなく、さらに、事物（ x ）もまた、当の反体性（ Y ）に反対するような性格（ X ）を、いかなる事物のところへ行くにしても繰り出すのだとするならば、そういう性格（ X ）を繰り出すもの自体（ x ）は、繰り出した性格（ X ）と反対の性格（ Y ）を決して受け容れない（105A2-5）。

3

さてプラトンは、これまで「大－小」「熱－冷」「奇数－偶数」関係の分析を基に、イデア論的原理を展開してきたのであるが、それを適用することによって、魂の不死証明を試みるのである。その論証の中心部分（105C9-E9）はソクラテスとケベスによるごく簡潔な対話形式で、以下のように展開されている。

「では答えてくれたまえ。——身体が生命をもつようになる（ζῶν εἶναι）のは、身体の中に何が生じてくるからなのかね」（ソクラテス）——「魂です」（ケベス）（105C9-11）

「つねに必ずそうかね」——「むろんそうですとも」（D1-2）

「すると、魂というものは、自分が何かを占有する（κατέχειν）と、

つねにそのものに生 (ζωή) をもたらす (φέρειν) わけなのだね」 — 「たしかにそのとおりです」 (D3-5)

「ところで、生と反対関係にあるものが何かあるだろうか、ないだろうか」 — 「あります」 — 「何かね」 — 「死 (θάνατος) です」 (D6-9)

「ところで、先の議論の結果すでに同意されているところにしたがえば、魂は、自分がつねに『繰り出す』 (ἐπιφέρειν) ところのものと反対のものをけって受け容れないのではないか」 (D10-11) — 「ええ、それはたしかにそうですとも」 (D12)

「では、偶数性を受け容れないものを、われわれはさっき何と呼んでいたっけ？」 — 「非偶数的なもの」 — 「正義を受け容れないものは？ また音楽性を受け容れないようなものがあれば？」 — 「非音楽的なもの、もうひとつは、不正なもの」 (D13-E1)

「では死を受け容れないようなものがあれば、それを何と呼ぶかね」 — 「不死なるもの (ἀθάνατον), と呼びます」 (E2-3)

「魂は死を受け容れないのではないかね」 — 「受け容れません」 (E4-5)

「してみると、魂は不死なるものだということになる」 — 「不死なるものです」 (E6-7)

「よろしい。これでこの点に関する証明は完了したと言ってよいだろうね？ それとも、どう思うかね」 — 「ええそれはもう、十分に証明されたと思います、ソクラテス」 (E8-9)

さて、イデア論的原理(イデア原因説)を基にしてなされたこの証明を、われわれはどのように解釈すべきであろうか。

プラトンは魂の不死証明の意図を、100B においてケベスに表明しながらも、その後イデア論的原理を中心に議論を展開しつづけ、ふたたび魂という言葉が引き合いに出されたのは、ようやくこの論証部分の C11 に至ってである。『パイドン』におけるイデア原因説の公式(「すべて美しいものは『美』によって美しい(100D7-8)」)に従えば、C11 のケベスの返

答は、「魂です」というよりは、むしろ「生命です」となるのがごく自然だったはずである。「身体（生物）が生命をもつようになるのは、生命にあずかるからである」というように、ところがソクラテスは、事前に、イデア原因説の場合にみられるような、安全で馬鹿正直な答え方をするのを禁じ、もっと手のこんだ答え方をケベスに要求していたのである。例えば、「あるものが熱くなるのは、その物体の中に何が生じるからか」という問いに対しては、「熱」という答えではなく、「火」という答えを要求し、また、「ある数が奇数となるのは、数の中に何が生じるからか」という問いには、「奇数性」ではなく、「一（という端数）」という答えを実例として示していたのである。⁶⁾ この例に従った答え方をするように促されて、ケベスはソクラテスの問いに対して「魂」という答えを示したのである。それまでしばらくの間、大一小、熱一冷、奇数一偶数などの関係について話題が集中していたことを考えると、ここで「魂」という言葉が何の前触れもなく現れるのは、やや唐突であるようにも考えられる。尤も、ケベスにしてみれば、自分が打ち出した反論内容の核心に触れる「身体（肉体）」という言葉が出現したことで、即座に「魂」という言葉が喚起されたのも、ごく当然の成り行きだったのかもしれないが、また、ケベスが何ら躊躇することなく「魂です」と答えた背景には、彼の意識の底に、魂というものが身体を生み出すのだ、という考えが潜んでいたのではないかと考えられる。もしかすると、ソクラテスはその点をすでに見越して、ケベス自身の口から、確実に「魂です」という答を引き出しうるという予測のもとに、新たな答え方の実例を示したのかもしれない。プラトンによる見事な技法の現れとも言えよう。

このようにして、身体－魂－生命の関係において、「身体に魂が生じることによって、身体は生命をもつようになる」ということが導き出されたのである。だが、プラトンにとってここで問題にすべきことは、身体と魂の関係以上に、魂と生と死、さらには魂と不死の関係なのである。そこでまず彼は、魂と生の関係について、「占領する・占有する (κατέχειν)」という戦争用語を引き合いに出して説明している。この言葉は、すでに

104D1-7 における「三という性格（アイデア）が何かある事物を^{●●}占有した場合、その事物は必然的に、ただ三であるだけでなく、さらに奇数でもあることになる」という一節の中で使用されているものである。その語をふたたび魂と生との関係に用いることによって、プラトンは、それまでに展開されていたアイデア論的原理の適用を明確に表明しているのである。そのことから考察すると、彼は 105D3-4 の一節において、魂は、ただ単に生をもたらす（*φέρειν* D4）だけにとどまらず、生と「決して離れてはありえない（*μηδέποτε ἀπολείπεσθαι* 104A3）」ものであるという意味までも、内含させているとみなすことができよう。つまり、魂と生のあいだの、いわば概念的類似性を示唆しているのである。この点を前提として定立し、それを確認することが、この証明では大きな意味をもっていたのである。その後、「生と反対関係にあるのは死である」という大前提を立て、引き続き展開された論証は、初歩的な数学的解法にみられる、言葉の置き換えと言ったような性格をもっていて、しかも、かなり巧妙な手法が凝らされているのである。

105D10-11 における、魂が「つねに『繰り出す』ところのものと反対のもの」が何であるかについて、対話のなかでスムーズな形で示されないまま、議論がすすめられている。内容的に、それが「死」を指すことは明らかなことであるとしても、105C-D9 までの論証形式から即時的に把握されるようになっていいるとはみなしがたい。なぜなら、105D11の *ἐκ τῶν πρόσθεν* (sc. *λογῶν*) に着目するかぎり、105D10-11は、論証部分と掛け離れた 105A2-5 の結び付きが密接であって、そのことが、直前の 105C9-D9 との間の無条件的連続性を、弱めていると解することができるからである。その後の一連の流れ（105D13-E2）からして、E2 の「死」を、当該の「反対のもの」に充当させようとするプラトンの意図的技巧を窺うことが可能である。と同時にまた、E4-5 から逆に類推すべき論証構成になっているとも言えよう。だが、そのいずれも、論理的に整然たるべき論証の展開形式からすると、やや透明性を欠いているといえよう。

さらにまた、105D13-E3 の終結部において、「死を受け容れないもの

は不死なるものである」と確認されているが、これはまさしく機械的に引き出されたもの、あるいはむしろ、巧みに誘導されたものにも等しい。偶数性に対する非偶数性、音楽性に対する非音楽性、正義に対する不正、という形式にそのまま準じて示されたものにすぎない。仮にもし、D6-9の「生と死は反対関係にある」という大前提に基づき、この「死を受け容れないもの」(E2)に対応するものとして、「不死なるもの」(E3)の代りに、「生」を当てたらどうなるであろうか。ケベスがそのように答えることは可能であったであろうから、論証部分のなかで、プラトーン—ソクラテスがケベスに対して、最も強く確認させたいと意図した部分は、105E2-7であると考えられる。その要点は単に

死を受け容れないものは、不死なるものである …… ①

ところが、魂は、死を受け容れない …………… ②

従って、魂は不死なるものである …………… ③

といったようなものである。そこで①の「不死なるもの」の代りに、「生」を代入すれば、必然的に③は、「魂は生なるものである」という帰結になってしまい、プラトンの意図した③は導き出されなくなってしまうのである。それを避けるためにも、105E3のケベスの答えは、どうしても「不死なるもの」でなければならなかったのである。つまり「生」を「不死なるもの」に言い換えることが必要だったのである。そのことからしても、105D13-E3で展開された議論が、濃厚な誘導尋問的性格を帯びているとみてとることができよう。さらに付言すれば、不死証明の核となるべき論証部分は、言葉の上だけの技巧的操作によるものであったといえるかもしれない。⁷⁾

4

さて、イデア原因説から始まり、それにつづくイデア論的原理に基づいて、魂の不死証明はなされたのである。したがって、事前に展開された原理の適用そのものが、当の不死証明の特性を左右するのである。つまり、「大—小」「熱—冷」「奇数—偶数」の各関係を、「魂—生」「魂—死」「魂

「不死」などの関係に結びつけて論じることの妥当性が、一つの問題となるのである。たしかに、「大—小」の反対関係は「生—死」のそれに対応するものと考えられるが、しかしその対応は、単に表面的なものにすぎないといえよう。なぜなら、大や小という言葉自身は、事物の質的内容を明確にするというよりは、むしろ事物の比較関係を表現する言葉であって、つねに「～より大」「～より小」といった比較概念を本性的に含有しているのに対し、生や死という言葉に比較概念を結びつけることは不可能だからである。なるほど、プラトンの言うように、「大」「小」といった形相の存在とそれら相互の排除関係を考えることは可能であるかもしれない。だが、形相としての「大」「小」における関係を、「生」「死」の関係にまでストレートに適用させようとするならば、少なからず不都合が生じるであろう。

その後プラトンは、「熱—冷」および「奇数—偶数」の関係から、火—「熱」—「冷」、雪—「冷」—「熱」、二—「偶数」—「奇数」、三—「奇数」—「偶数」などの系列を導いた。そして各系列のあいだで確認された原理を、いわば「魂—生—死」といった系列に適用させ、魂の不死証明に結びつけているのである。火—「熱」—「冷」、三—「奇数」—「偶数」などの系列においては、つねに各項目の形相と内在形相（個物としての火や三などが、それ自身のなかに内在していると考えられる形相）が問題にされた。しかもそこでは、形相間の含意関係と排除関係についてのみならず、さらに、形相と内在形相との間の含意関係と排除関係に、議論が集中していたのである。したがって、その議論で明らかにされた原理を、「魂—生—死」の系列にも適用しようとするれば、当然のこととして、魂や生や死の各形相および内在形相の関係も、明確にされなければならないのである。ところが、プラトンは、不死論証のなかで、形相あるいは内在形相としての「魂」や「死」、または「不死」などについて、何ら言及していないのである。ただ単に、不死証明の後で、それに基づいて付加的になされた魂不滅の論証において、「神や、生の形相や、またほかに不死なるものが何かあるならば、……」（106D5-6）というように、生の形相について

一言触れているだけである。

そこで、火－「熱」－「冷」、三－「奇数」－「偶数」などの系列を、「魂－生－死」の系列に適用させることが、プラトンの実際的な意図であったとすれば、おのずと、魂を諸系列の初項に置かれている火や三などと同列に論ずることが、適切であるかどうか疑問になってくる。つまりそれは、火や三などについての内在形相を、どのように捉らえるかという問題と並行して、形相もしくは内在形相としての魂についての問題につながるのである。

魂のアイデアについての言及は、『パイドン』のみならず他の作品においても全くなされておらず、それについての諸家の見解はさまざまである。のみならず、火や三などの内在形相についても、それは一致していない。

Hackforth は、火と三および魂をも内在形相として解釈する立場をとりながら、なおかつ、不死証明のなかで、火は時として内在形相として描かれたり (105A1,C2)、また時には雪と同格に個物として表されたりもしている (103D10)、と指摘している。⁸⁾ また魂に関しては、少なくとも不死論証の議論においてみるかぎり、疑いもなく内在形相としてみなされていると強調している。⁹⁾

また D. Gallop は、G. Vlastos や D. Keyt などが、104D5-7 での三 (の形相) と平行に火や雪を内在形相と解釈していることに対して、反論を唱えている。¹⁰⁾ さらに彼によれば、プラトンは、本性的に不死なる他の形相と同列にして魂の形相を問題にしているのではなく、個々の魂についての不死論証を試みているのである。従って、その点からも Gallop は、魂を形相あるいは内在形相として解釈することを避けている。¹¹⁾

さらに、Guthrie は、プラトンが魂を形相とみなしているなどということとは、およそ考えられないことであると言明し、われわれとしては次のようなプラトンの言葉に基づいて、魂を捉えることで満足すべきであると提言している。¹²⁾

「一方には神的なもの、不死なもの、知性の対象となるもの、単一の形相をもち、分解を受け入れず、つねに自己自身のあり方を変えぬ恒

常的な存在があり、魂はこのような種族の存在にこそ、最も性格上の共通性をもっているのである (80B1-3)」

のように、諸説が飛び交い論争が後を絶たず、いまだ定説をみていないのである。

思うにプラトンは、不死証明の前提としたイデア原因説の真理性を明示し、形相と内在形相とのあいだの含意・排除関係における原理に、普遍妥当性を付与させるために、次元の異なった様々の実例 (系列) を、意図的に選び出したのではないかと考えられる。ところが、形相と内在形相との区別が、諸系列での説明において必ずしも明らかにされていないのである。さらにはまた、「火—熱—冷」系列における含意・排除関係が感覚によって知覚される自然的事実であり、他方、「三—奇数—偶数」系列におけるそれが、用語の含意に関する言説である、という系列間の本質的で重要な区別が、曖昧なままにされているのである。¹³⁾ その結果、それらの系列において展開された原理を、そのまま「魂—生 (不死)—死」系列に適用することで、更に一層、火や三さらには魂などの位置づけそのものも、曖昧なものとなっているのである。以上のことからして、諸系列における原理を、「魂—生 (不死)—死」系列に適用することには、いささか無理があったのではないかと考察される。そのことと相俟って、魂の不死証明には、論証部分の外見的簡潔さとは裏腹に、かなり不透明な部分も付随しているのである。

だが、魂の不死証明は、ケベスやシミアスの反論に応えるためのものであると同時に、また、死を直前に控えたソクラテスを目の当たりにして、人間の魂が肉体の滅亡とともに、完全に消滅してしまうのではないかと、彼らの不安と恐怖を取り除く役割をも兼ね備えているものでもあった。この点を考え併せると、たとえその証明が、十全な意味で完結したものとはいえないとしても、それはやむを得ないことであろう。

それを裏付けるかのように、論証の最後において、ケベスが論証の完結さを讃え、シミアスがそれを認めつつも、なお心に一抹の不安が残っていると漏らしたとき、ソクラテスは、次のように述懐している。

「とくにわすれてはならないのは、われわれがいちばん根本に立てた前提のことだ。……あれを君たちが徹底的に分析したときにこそ、ばくの思うに、はじめて君たちは、人間として可能なかぎり、この言説について行くことができるのだ (107B5-8)」

この言葉からすると、プラトンは、不死証明の完全さに対する危惧の念を暗示させていると同時に、魂の不死証明そのものが、その基礎前提、つまりイデア理論の徹底的探求を促すものであったことを示唆しているのである。

注

- 1) Frede, D.: The Final Proof of the Immortality of the Soul in Plato's *Phaedo* 102a-107a, *Phronesis*, vol. 23, 1978, p.27.
Bluck は, "Plato probably regarded the last one, and only the last one, as satisfactory and convincing" と解釈しているが, はたしてそうであろうか.
Bluck, R. S.: *Plato's Phaedo*, Lndon, 1955, p.18.
- 2) Bluck, R.S., *op. cit.*, p.105.
- 3) 「あずかる」のギリシャ語 *μετέχειν* は, さらに「分有する」「分取する」などとも邦訳され, この一節における *διότι μετέχει* の *διότι* に着目し, イデアが「原因」となる仕方が, 「分有によって」であると分析することで, イデア原因説は, さらにイデア分有原因説になっているとも言われる。だが両説は, 明確に区別されるものというよりは, むしろ連続性をもっているものとみなされている。
田中美知太郎『プラトンⅡ』岩波書店, 1981年, 555-558頁参照
- 4) 藤沢令夫『イデアと世界』岩波書店, 1980年, 127頁参照
- 5) プラトンが議論の展開のなかで, 戦争用語を比喩的にしかも頻繁に用いていることを, Burnet, J. が指摘して以来, その点をめぐって研究者のあいだで, いろいろ取り沙汰されている。
Burnet, J.: *Plato's Phaedo*, Oxford, 1911[1972], p.116, 119, 123, etc.
- 6) Ross, W. D. は, 実例として示された答え方に疑問を投げ掛けて, 次のように述べている。"While something is gained by the new answer, something is also lost. The new answer does not run the risk of being tautologous as the old did, but at the same time it loses the universality of the old answer."
Ross, W. D.: *Plato's Theory of Ideas*, Oxford, 1951[1971], p.33.
田中美知太郎 前掲書, 571-572頁参照
- 7) Hackforth, R. は, やや乱暴な言葉を用いて, 次のように論じている。
"……and the final 'proof' of immortality is a disguised assertion that the term 'soul' implies, as part of its meaning, the term 'alive'." Hackforth, R.: *Plato's*

Phaedo, Cambridge, 1955[1972], p.157.

- 8) *Ibid.*, pp.161-163, 特に p.162, n.3.
- 9) *Ibid.*, p.162.
- 10) Vlastos は 103C10ff. の議論内容から熱・冷と同列に、火や雪を形相とみなし, “He(Plato) had already introduced the Forms Hot, Cold, Snow, Fire, to illustrate the relation of incompatibility between Forms” と明言している。Vlastos, G.: *Reasons and Causes in the Phaedo*, *Philosophical Review* 78(1969), reprinted in *Plato I*, ed. G. Vlastos, Indiana, 1978, p.159, n.70. また D. Keyt は, 104D5-7 を準拠にするとともに, 火と雪が熱-冷に対して, 大-小の場合と同じように作用していること, さらには, 103E2-5 の原理が火-雪に明白に適合しているという点などから, 火と雪を内在形相として解釈している。The Fallacies in *Phaedo* 102a-107b, *Phronesis*, vol.8(1963), p.168, n.2. 両者の見解に対し, Gallop, G. は, 主に 106A における議論を論拠にしながら反論しつつ, 火や雪を, 形相あるいは内在形相としてさえもみなしえない, と強弁している。Gallop, G.: *Plato Phaedo*, Oxford, 1975, p.197-199.
- 11) Gallop, G., *op.cit.*, pp.213-215.
- 12) Guthrie, W. K. C.: *A History of Greek Philosophy*, vol.4, Cambridge, 1975, pp. 360-361.
- 13) Hackforth, R., *op. cit.*, p.157.